

# 情報学研究科

Graduate School of Informatics 20th Anniversary Issue

## 創立 20周年記念誌

ダイジェスト版

平成 30 年 9 月



京都大学大学院情報学研究科

Graduate School of Informatics, Kyoto University



# 目次

---

ごあいさつ .....	京都大学大学院 情報学研究科長 中村佳正	1
これからの情報学で注意すべきことは? .....	長尾真	2
情報学研究科創立20周年に寄せて .....	富田真治	5
開かれた同窓会, 超交流の10年 .....	情報学研究科同窓会 会長 糸直人	11
平成30年度教員配置一覧 .....		14
この10年間の研究科での定年退職者(早期退職者含む) .....		16
物故者 .....		18



情報学研究科創立20周年記念誌(完全版)のご案内



## ごあいさつ

京都大学大学院 情報学研究科長 中村佳正

1998年（平成10年）4月に京都大学の大学院として情報学研究科が創設されてから20年が経過しました。もはや、なぜ情報工学や情報科学ではなく情報学なのかの説明は不要となりました。いつの世にも色あせることのない情報学という大看板を掲げてくれた先人に厚く感謝申し上げます。

この間、2008年11月に盛大に創設10周年を祝いました。同年9月15日のアメリカの一投資銀行の経営破綻が世界規模の金融パニックとなり、やがて大幅な景気後退へも繋がっていきました。情報学研究科のこの10年間は、リーマンショックと呼ばれることになるこの危機後の産業構造の変革期と重なります。大手企業の経営危機が連鎖し、製造業の集約化やオフショアリング、あるいは製造業からの脱却と様々なベクトルが交錯する中で、東日本大震災（2011年）とその後の科学技術への信頼のゆらぎを経験しました。

近年では、情報通信技術（ICT）のいっそうの高度化とそれを橋渡しするネットワーク化によって、情報、人、組織、物流、金融など、あらゆる「モノ」が瞬時に、しかもグローバルな環境下で結び付き、相互に影響を及ぼし合う新たな合従連衡の状況が生まれています。人工知能、IoT（モノのインターネット）、ビッグデータ、ロボットといった人間社会のみならず人間の在り方そのものにも大きな影響を与える新たな科学技術革命が進行中です。既存の産業構造や技術分野の枠にとらわれることなく、これまでにない付加価値が生み出されるようになってきました。情報学を通じて、社会構造や人間の行動様式、価値すら変わろうとしています。

時代の追い風を受けて情報学に集う若者は年とともに増えており、学部情報学科については近年、

過去最大数の志願者を得ています。留学生の増加もあって大学院修士課程の入学者も最大数を更新しています。

その一方で、一時は125名を数えた（任期なしの）教員定員は、京都大学の教員定員の95%シーリング（2013年）とそれに続く毎年の定員削減のため現在は109名となっており、各専攻とも常時3ポスト程度を埋めることができなくなっています。このため、専攻によっては若手教員の割合がかなり下がっています。

このような変革期ならではの乱高下のもとで、情報学研究科は何を目指せばいいでしょうか。

世界に先駆けて設立した情報学研究科ですから、この国の未来を見据え、新しい研究分野の開拓に果敢にチャレンジすることが求められるでしょう。私は大学の価値の源は人にこそあると思います。そのためには、情報学研究科は、第一に、学生や若手研究者がポジティブな可能性や自らの将来像を感じることができる組織であり続けたいと念じております。

まずは、この10年間に取り組んだ文科省国際化拠点整備事業（グローバル30）による国際化や「デザイン学」博士課程教育リーディングプログラムをさらに発展させることが重要と思います。また、これまでの連携ユニットやICT連携推進ネットワークを通じた産学連携に加えて、共同研究講座、産学共同講座といった新しい産学連携の仕組みをいち早く取り入れて、社会人博士の増だけでなく社会人教育まで視野に入れた社会貢献を展開していきたいと考えます。

最後になりましたが、情報学研究科への変わらぬご支援に心から感謝の意を表します。次の10年も情報学研究科に熱いご期待をお寄せいただけますよう、よろしく願い申し上げます。

## これからの情報学で注意すべきことは？

長尾 真

これからの情報学分野はどうなってゆくであろうか、何を目指して努力すべきなのだろうか。これが情報学研究科が創設されて 20 年を迎えた我々が直面する課題であり、真剣に考えねばならない問題であろう。

情報技術はこの 20 年間に社会のあらゆる分野に急速に浸透し、世界を変えてきた。あらゆる人が発信し、世界中の人がこれに反応する時代となり、社会の血脈である通貨にまで変化をもたらす時代である。情報は大量に生み出され、蓄積され、分析され、そして利用されるということによって新たな価値を生み出している。あらゆる便宜がネットから得られるとともに、プライバシー保護の問題や、ネットを利用した犯罪、そうでなくても種々の悪影響を社会に与えている。

情報はあらゆる学問分野におけるエッセンスである。情報学を進展させてゆくためには、こういったあらゆる分野での情報の利用がどのようなものであるかを知らねばならず、そのためにはそういった分野の専門家との協力なくしては学問の発展はありえない。数十年前の大学の研究は研究者個人の興味で個人的に深く考えることによって行われていたが、今日の研究は、特に情報分野においては他分野の研究者との真の意味での共同研究でなければ社会にとって意味のある良い研究とはなりにくいという状況にある。数学のような純粹学問においても今日では物理学などの研究者の抱えている問題に潜む数理的課題を検討するという時代になっているのである。

つまりそれぞれの学問が固有の領域を持ちながらも、学問の境界にまたがって、あるいは境界というものが無い世界として物事を考えねばならない時代に入ってきている。常に全世界を相手に物事を考えねばならない。そうなれば学問分野の再

編成ということも視野に入れねばならなくなるだろう。情報学はあらゆる学問に関わるが故に、そういったことを最もよく考えねばならない学問分野である。特にこれからの社会を変えてゆく原動力となりつつある人工知能においてそれが言えるだろう。したがって情報分野における教育はそういったことに十分配慮したものでなければならない。

学問研究全体がどうしてこのような状況になってきたのだろうか。それは次のように考えられる。ルネッサンス以来今日までを眺めると、まずは力学の基本原則が明確になり、化学その他においても基本となる原理、法則が明確にされた。これは物事に対する第一次近似の理論と考えてよい。自然は数学によって作られていると信じられた時代である。ところがそういった基本原則だけでは十分に説明できない現象がいろいろと現れ、これを説明し、取り扱うために、それぞれの専門分野に固有の法則の確立への努力がなされて来た。これを第二次近似の時代と名付けよう。これは 20 世紀の半ばまで行われてきて、今日の大学の学部や学科の構成となっている。

しかし自然や社会における複雑な現象の厳密な解明と説明、それを利用した行動や物作り、システム作りなどのためには第二次近似の世界では不十分であり、第三次近似を考えねばならないということに人々は気づき始めた。そこでは残念ながら理論というものがほとんど成立しない。そこには事例、あるいは経験的な知があるのみである。考えてみると昔の人は過去の事例に見習ってすべのことに処してきた。最先端技術の時代に科学の発達していなかった時代の知恵を参照しなければならないというのは面白いことである。幸いにコンピュータとネットワークの先進社会において

はあらゆる分野の事例を膨大に集めることができる時代になっている。ビッグデータの時代であり、第三次近似の時代である。ビッグデータの必要性はこのような学問的進展の流れの中に位置づけられる。

ビッグデータの解析によってある種の性質、あるいは法則とでもいえるものが発見できたとすれば、それは第二次近似の時代に発見されていてよいものだったわけであるが、人間の記憶能力の限界と異分野間の関連を連想的に結び付ける推論能力の不足から、分かっていなかったことがコンピュータの力を借りることによって発見されたということであろう。現在のデータエンジニアリングの多くはこのような発見を目指している。

第三次近似の時代にもう一つ言えることは、非常に珍しい現象に対してどう対処するのが良いかを過去の事例を参考にすることで実現できるということである。だからあらゆる過去の事例、特に珍しい事例を落とさずに集めることが求められる。そしてそのような事例を参考にするために、その事例がどうして生じたかを説明できれば、それが新しい理論、法則となるということであろう。それがパラダイム転換になる端緒になるのであれば、素晴らしいことである。

そのためにはどのようなデータを大量に集めねばならないかが問題になる。全く関係がないと思われるデータを集め総合的に調べなければ新しい発見は難しいというのは当然であろう。例えば、人々の健康状態は食べ物に関係することは有り得ても、その地の気候や土壌や水などに関係しているかもしれないということまで考えるという想像力を働かせることが必要だろう。つまりはビッグデータの世界においても境界のない状況であり、そのような観点を持たねば新しいことは生まれてこないだろう。ビッグデータといっても全く同じデータばかりを集めてもしょうがない。ビッグデータに寄りかかっておれば安心だと考えるのはあまりにも安易な考え方であることにも気をつけねばならない。参照できる過去の事例が見つからなかったときどうするかは大きな問題である。こ

の場合には第一次近似の世界に戻って最初から出直すしかないだろう。人間の英知を働かせる出番である。

20世紀までは物事を理解するために分析をすることが中心の時代であった。つまり科学の時代である。それに対して21世紀は20世紀までに得られた知識を用いて新しい物事を創造する時代である。つまりこれからは工学の時代となる。科学で得られた知識を用いれば、現在の地球上に存在しない新しいものをいくらでも作り出すことができる。生命科学の分野でさえ、これまで地球上に存在しなかった新しい生命を人工的に作り出す、つまり自己増殖する人工生命が作られる時代である。生命科学も工学の時代に入ってきているのであって、このような新しい創造物がどのような意味や価値を持つものか、現在の地球上の生命体、動物、植物、その他にどのような影響を与えるかは簡単にはわからない。何十万年、何百万年かの淘汰を経なければ本当のことはわからない。これまで地球上に存在してきたものはそういった実に長い時代の淘汰を受けてきたものであるから、現在の人間や社会に対して深刻な害を与えたり悪さを働くものではないというのがほとんどである。

しかし例えば今日問題になっているものの一つにプラスチック微粒子がある。これは我々が使った後捨てられたプラスチックが粒径0.05ミリの程度の微粒子となって海水に含まれるようになっていくという。北極海においても大量のプラスチック微粒子が含まれているというから、すでに地球上の全海水域がそのように汚染されているのであろう。この海水を飲んでる魚の体内にも微粒子が含まれ、その魚を食べる人間にも蓄積されてゆくことになるだろう。これがどのような影響を人間や動植物に与えるかはわからない。プラスチックは便利なものでいろんなところで使われているが、それがこのような事態を引き起こしていることは、プラスチックが発明された時点では全く想像しなかったであろう。

このように、新しいものを創造するときには、その良さ、便利さなどのポジティブな面だけを見

るのでなく、そのネガティブな面の可能性についても十分に考えねばならないのである。このようなネガティブな面の可能性をこれまでに得られている科学的知識と昔の人の知恵を用いて推定する人工知能を開発することはある程度できるであろうし、大切な課題ではなかろうか。

このように全世界を相手にあらゆる可能性を考えねばならないとともに、長期にわたっての変化についても視野に入れなければならない。つまり時空間という四次元世界全体を考えながら学問研究をしなければならない、境界の設定のできない時代に我々が置かれていることの自覚が必要なのである。これからの工学はどういったものを作り、どういったものを作ってはならないかという立場、すなわち目的を明確にした研究をする必要があることを自覚しなければならない。我々研究者はそういった意味で大きな責任を負わされていると言わねばならないだろう。

これは情報学についてもいえることである。世界中の情報が入りやすく、バーチャルな世界を楽しむことができるということは素晴らしいことだろうが、そういったことが人間の精神、心を与える影響はほとんど考慮されていない。情報技術を利用した犯罪はどんどん増えているし、高速に大量の情報が頭脳に入ってくるという環境が人間に対してどのような影響を与えるかはこれから深刻な問題となってゆく可能性があるだろう。下手をすると社会の崩壊につながってゆく危険性もありうると思うことが必要になるだろう。それもゆっくりとした変化であれば、その危険性に気づき途中で改善するという手段をとることもできようが、情報分野の変化は急速であるから、そこに社会問題を見つけたとしても、それをストップしたり改善の手を打つという時間的余裕がないという困難な状況があるわけである。システムにフィードバックがうまく掛からず極端に行ってし

まって爆発的な発振状態となるわけである。人間には人間的速度というものがあり、常にフィードバックをかけながらいろんなことをしているのに対し、情報世界はミリ秒、マイクロ秒の世界であるからとても太刀打ちできない。人間はこのような世界の敗者として生きてゆかねばならないのだろうか。こういったことについて情報学は何ができるのかを真剣に考えねばならない時代が来つつあるといえよう。情報学は人間と社会にとって必須のものであるが、それが生み出す物事の功罪をよく考えるべき時代に来ているのである。

情報は頭脳において処理される。それが頭脳の中のどこでどのように処理されているのかについて研究することがこれからの大きな課題であろう。19世紀後半から発展してきた心理学や認知科学の成果、さらに今日急速に発達している脳科学を参照し、これらの学問研究と協働してゆくことが必要である。情報学における知識、アルゴリズムの分野は大脳皮質が中心に関わっているが、外界世界から得る五感という知覚と認識は言語化することの難しい感覚レベルの処理である。そしてこれらの活動の裏には無意識という層があり、これが物事の判断などの知識や感覚の働きに影響していることがフロイトによって明らかにされた。さらにこれら全体を統御しているものとして心あるいはその本質である魂と呼んでもよい生命の根源であるものを想定することができるのではないだろうか。こういった要素が全体的にどのように相互関連して働いているのかを究明しモデル化しなければ真のロボットは作れない。そして異なった文化、物の考え方のロボット同士の相互理解と協力といった世界を構想しなければ、ロボットが主役となる未来戦争という悪夢しか実現できないかもしれず、人類の破滅となってしまう可能性にも考えを致さねばならないだろう。2045年の技術的特異点がどのような形になるか/すべきかの問題でもある。



# 情報学研究科創立 20 周年に寄せて

富田 眞 治

## 1. はじめに

平成 18 (2006) 年 3 月から平成 21 (2009) 年 2 月まで情報学研究科長を拝命し、在任中の平成 20 (2008 年) 11 月 22 日には創立 10 周年記念式典を挙行了。時の経つのは速いものでもう 10 年を経過した。私は研究科長退任後すぐに平成 21 (2009) 年 3 月には 63 歳の定年を迎え退職した。

本稿では

(1) 創立 10 周年記念誌や将来構想検討委員会報告などを見ながら、私の研究科長時代にどのような問題意識を持っていたか、どのような改革を行ってきたか、何が残された課題であったか、について振り返ってみたい。

(2) 定年退職後、平成 21 (2009) 年 4 月から平成 29 (2017) 年 3 月まで文科省の肝入りで設置された世界トップレベル研究拠点 (WPI) の一つである「物質-細胞統合システム拠点 (iCeMS)」の特定拠点教授/事務部門長として、平成 29 (2017) 年 10 月から専門職大学院である「京都情報大学院大学」の教授 (現在副学長) として勤務してきた/している。2つの研究/教育組織は情報学研究科とは全く異なるコンセプトで研究教育や組織運営がなされているので、将来の情報学研究科の在り方の検討にとって参考になるかもしれない。それらの組織の概要について簡単に触れたい。

(3) 定年退職後、iCeMS での統括業務に専念していたので、情報学とは全く疎遠になっていたが、情報の専門職大学院の教授として情報に復帰したことから、老婆心ながら少し京大の情報学研究科の在り方について率直な意見を述べてみたい。

## 2. 創立 10 周年ごろの研究科の取り組み

情報学研究科創立 10 周年記念誌の中に私の書いた「ごあいさつ」に当時の様々な取り組み (COE をはじめとする教育改革、将来構想検討委員会などによる組織改革、ICT イノベーションなど産官学公連携、けいはんな連携など他機関との連携、市民への情報発信などが列挙されている。当時の研究科の教育研究状況、運営体制や問題意識を知るうえで有益と思われるので、再掲したい。

### 主な教育研究プログラム

- (1) グローバル COE プログラム (文部科学省)
  - ・知識循環社会のための情報教育研究拠点 (平成 19 年度採択、平成 23 年度まで継続)
  - ・光・電子理工学の教育研究拠点形成 (平成 19 年度採択、平成 23 年度まで継続)
- (2) 先導的 IT スペシャリスト育成推進プログラム (文部科学省)
  - ・高度なソフトウェア技術者育成と実プロジェクト教材開発を実現する融合連携専攻の形成 (大阪大学、奈良先端科学技術大学院大学などとの連携。平成 18 年度採択、平成 21 年度まで継続)
  - ・社会的リスク軽減のための情報セキュリティ技術者・実務者育成 (奈良先端科学技術大学院大学、大阪大学、北陸先端大学との連携。平成 19 年度採択、平成 22 年度まで継続)
- (3) けいはんな大学院・研究所連携プログラム (平成 18 年 10 月 23 日協定締結)
  - ・京大、阪大、奈良先端大、けいはんな地区研究所群 (情報通信研究機構 (NICT)、国際電気通信基礎技術研究所 (ATR)、日本電信電話会社コミュニケーション科学研究所 (NTTCS 研)) との情報学 (情報科学) に関する連携プログラム。

- (4) 21 世紀 COE プログラム (文部科学省)
  - ・ 知識社会基盤構築のための情報学術拠点形成 (平成 19 年 3 月終了)
  - ・ 電気電子基盤技術の研究教育拠点形成 (平成 19 年 3 月終了)
  - ・ 動的機能機械システムの数理モデルの設計論 (平成 20 年 3 月終了)
- (5) 魅力ある大学院教育イニシアティブ (文部科学省)
  - ・ 社会との協創による情報システムデザイン (平成 19 年 3 月終了)
  - ・ シミュレーション科学を支える高度人材育成 - モデリング、アルゴリズム、計算機アーキテクチャの機能的統合 - (平成 19 年 3 月終了)

#### 主な情報発信

- (1) こんなに楽しい数理の世界
  - ・ 公開講座 (平成 20 年 8 月 9 日開催)
- (2) 知っていますか IT の秘密
  - ・ 公開講座 (平成 20 年 3 月 29 日開催)
- (3) ソフトウェア技術者教育: 期待と国際的な潮流
  - ・ 大阪大学・京都大学・神戸大学連携シンポジウム (平成 20 年 2 月 27 日開催)
- (4) ICT 連携推進ネットワーク
  - ・ 産官学、学学、社会連携のためのヒューマンリレーションの構築のための組織 (平成 20 年 2 月設置)
- (5) ICT イノベーション 2008
  - ・ 情報学研究科の研究内容のポスターセッションでの発表 (平成 20 年 2 月 20 日開催、530 名の参加)
- (6) 情報学は社会にどう貢献するか - 情報学が可能とする新次元の Quality of Life -
  - ・ 情報学シンポジウム (平成 19 年 12 月 13 日開催)
- (7) 夢のある情報教育に向けて - 高校と大学の連携をいかに進めるか -
  - ・ 公開講座 (平成 19 年 3 月 31 日開催)
- (8) 情報学における人材養成と知的財産

- ・ 情報学シンポジウム (平成 18 年 12 月 7 日開催)

#### 組織評価と将来構想

- (1) 研究科将来構想検討委員会の設置 (平成 19 年 5 月)
- (2) 平成 19 年度自己点検・評価報告書の発行 (平成 19 年 12 月)
- (3) アドバイザリーボードの設置 (平成 20 年 1 月第 1 回会合)

#### 3. 創立 10 周年ごろの研究科の将来構想

私が研究科長であった平成 18 (2006 年) 年 5 月に将来構想検討委員会を正式に設置し (1 年前に懇談会も立ち上げて検討している)、6 専攻体制の改組を中心に各専攻の委員より様々な構想を具体的な改革後の専攻名も含めて提案していただいて (PPT のポンチ絵などで)、将来構想検討委員会の報告を私の研究科長任期終了間近の平成 21 (2009) 年 2 月 13 日に教授会で行った。平成 21 年度からの改革の実施には至らなかったが (即実施可能な具体的な改革案の提示はできなかったが)、第 1 段階、第 2 段階での改革すべき項目などが提示されており、改革の必要性は教員の中で広く認識されたように思う。私は改革するなら今後 10 年間しかないと認識していた。43 名の教授の内、30 名近くが今後 10 年間で定年退職を迎え (定年が 65 歳に延長されたので少し緩和されたが)、この時期にこそ研究教育分野の抜本的な改革をしないと取り返しのつかないことになるという強迫観念にも似たものがあつた。このため、将来構想の検討に懇談会も含めると 3 年も費やした (委員の先生方には長期に渡って大変熱心に議論をしていただき感謝している)。

#### 将来構想検討委員会の報告要旨

情報学研究科将来構想検討委員会は、平成 19 年 4 月 13 日の教授会申し合わせにより時限付きの委員会として設置され、平成 19 年 5 月の第 1 回会議より平成 21 年 1 月までの間に平成 19 年度

には 11 回、平成 20 年度には 9 回の委員会が開催された。本将来構想検討委員会で検討を行う前提となった情報学研究科の重要な課題は、主に、(1) 情報学という学問分野や情報学の人材養成に関して、いわゆる情報離れという風潮や、社会における情報学や IT 分野の位置づけの弱まりに対する対処、(2) 情報学研究科の修士／博士の学生の充足率の低迷化、および、(3) 今後 10 年以内に研究科内で起こる教授の大量定年退職への対処である。

#### (1) 第 1 段階改革の具体的検討項目

##### ① 教員選考準備委員会（仮称）の設置：

教員の採用人事に際し、研究分野の流動性および適切性を、研究科の将来構想と絡めて検討すること。具体には、教員選考の申し出に先立ち、単一専攻に閉じない準備会を開催し、大所高所からの意見交換を行なう。

##### ② 新たな CS の在り方としての情報デザイン学専攻／コース：

協力講座であるメディアセンターも含め、これからの学理としての CS の在り方と高度職業人養成を検討する。その具体化として、情報デザイン学専攻／コースの設置方式について具体的に検討する。

##### ③ 複雑系科学専攻の専攻名称の変更：

次期中期計画期間内での適切な対応を検討する。

#### (2) 第 2 段階改革と考えられる検討項目

国立大学法人の第 2 期中期目標・中期計画とも関連し、中長期的な視点からの検討を要する事項

- ① 学生に対する教育プログラムの変革
- ② 学生の情報離れと充足率向上対策
- ③ 大講座制の実質化
- ④ 新たな学問領域の検証
- ⑤ 研究科専攻の改廃
- ⑥ 全学共通教育・学部教育とのリンク
- ⑦ 海外留学などの促進を視野に入れた教育の国際化

#### 4. 世界トップレベル研究拠点のミッションと研究・運営体制

##### 世界トップレベル研究拠点のミッション

情報学研究科長を最後に定年退職し、名誉教授になると同時に「物質－細胞統合システム拠点（以後 iCeMS と呼ぶ）」の事務部門長（特定拠点教授も兼任）に就任した。iCeMS は平成 19 年（2007）10 月に設置された世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）で採択された研究拠点の一つである。WPI のミッションは、① 先端研究の推進、② 学際融合研究の推進、③ 国際化の推進、④ 研究組織や運営組織のシステム改革の 4 つに纏められており、将来の大学運営モデルの一つとして文科省では位置づけられている。WPI の特徴は、多くの研究・教育プロジェクトが一つあるいは二つの目標を掲げて推進されるのに対して、上記の 4 つのミッションを総合的に達成すること（さらにはそれを全学に波及させること）に大きな特徴がある。私が iCeMS に在任した頃には、拠点当たり予算 12~13 億円／年で京大、東大、阪大、九大、東北大、NIMS の 6 拠点があった。国際化や学際研究には Under the one roof の環境が極めて重要であるということで、京大以外では立派な研究棟が新築された（京大は場所がなかった）。現在の WPI は東大など 7 拠点と京大など 4 拠点からなる WPI アカデミー（10 年時限で終了した拠点で組織）からなっている。iCeMS は 10 年延長が認められなかったため、平成 29（2017）年 4 月から新設された「高等研究院」（森 重文院長）傘下の中核研究所となって存続している（WPI アカデミーの予算はごくわずかであるので、主として京大からの人的財政的支援で存続）。

##### iCeMS での国際化

国際化についてであるが、WPI では英語の公用語化、30% 以上の外国人研究者率が義務付けられている。iCeMS では、主任研究者会議（教授会に類似）やセミナーなどはすべて英語で行い、研究者への通達文書の英語化も行う。私の在職当時、研究者数は全体で 200 名程度、内外国人は

60 名程度、事務職員は 35 名（内京大職員は 8 名）で、半数はバイリンガルであった。英語業務の多くは派遣職員などに依存していた（TOEIC850 点くらいが採用の基準）。各研究室にはバイリンガルの秘書を置き、国際広報に 3 名、国際企画に 3 名の職員を雇用して、15 国際機関との連携、大小年 10 回程度の国際シンポ、外国を含めた年 3 回の大型アウトリーチ開催、また外国人支援員 2 名が生活支援に当たっていた。京大での外国人支援、英語による文書配布などの国際化は近年強化されてきたが、iCeMS の貢献は大きいものがあったと思う。

国際化でいえることは、外国人研究者数のクリティカルマス形成が必要であり、少なくとも 15% くらいの外国人比率にならないと、国際化への加速には繋がらない。また、極東の地の iCeMS は研究者の国際循環の面ではまだまだの状態であり、年俸など待遇面や生活環境自体の改善も必要である。

#### iCeMS での運営体制

iCeMS の研究組織についてであるが、WPI の各拠点には毎年プログレスレポートを提出し、全体のプログラム委員会で最終の評価がなされ、年予算にも差別化がなされる。拠点の知名度もチェックされた。研究ビジョンの策定、研究体制の維持管理など、すべて拠点長のトップダウンの意思決定でなされ、拠点長の責任は極めて重い。プログラム委員会などでは拠点長は矢面に立って答弁する必要があり（それも英語で）、横で見ている気の毒なくらいである。切れそうになるまでネジを巻かれ、嫌気もさすが、これくらいしないと大学は変わらない気がする。

山中伸弥教授は iCeMS 設立時（平成 19（2007）年 10 月）から iCeMS の教授であったが、ヒト iPS 細胞の発見に伴い、iCeMS では平成 20（2008）年 1 月に iCeMS 内に CiRA という研究センターを設置し、独立した研究運営体制とした（その後、平成 22（2010）年 4 月、CiRA は iPS 細胞研究所として学内研究所として独立した）。これは拠点長のイニシアティブを示す好例であ

る。

iCeMS の事務部門長のポストは今でいうところの中間職のはしりであり、私は、研究者のマインド、研究科長経験者としての教員調整能力、事務組織の扱いにも精通、ということで任命されたようである。現在 WPI 拠点の事務部門長はほとんど研究者出身である。また、事務部門長をはじめ研究者支援を強化したことは、京大の学術研究支援室（URA）などに多大な影響を与えた。

#### iCeMS での研究の評価と人事

教員や研究員は京大のテニユアポストを持った 5 名の主任研究者（PI）を除き（PI 総数は 15 ～ 20 名）、すべて任期制（業績評価の上延長可能）で、PI でも業績が上がらず、任期 5 年で転出された方もいる。業績評価の際には、論文の質としてはインパクトファクター 10 以上のジャーナルでの採択論文数などが基準となっていた。また、日本語の論文などはカウントもされていなかった。

#### 5. 京都情報大学院大学の学際教育と国際化

京都情報大学院大学は平成 16（2004）年 4 月、日本最初の IT 専門職大学院として開学し（母体は昭和 38（1963）年に設立された日本最初のコンピュータ教育機関、京都コンピュータ学院）、現在、応用情報技術研究科 ウェブビジネス技術専攻を設置している（1 研究科 1 専攻）。情報系・経営系の融合領域での教育を推進するとともに、教育・研究・学問の領域をマンガ・アニメ、舞台芸術 IT などのコンテンツビジネスへ拡大し、医療や海洋、農業、金融、観光など次世代産業での IT 利活用技術の教育も開始している。先進諸国で用いられている最新の教育手法、カリキュラムの導入にも積極的である。

学生定員（入学定員×2）」は 2004 年の開学時には 160 名、現在（2018 年）は 720 名と 4.5 倍に増加している。留学生が非常に多いが、これはアジア圏での専門職大学院に対するニーズが高いことが主な要因ではあるが、京都コンピュータ学院

が 30 年来行ってきた発展途上国へのコンピュータ寄贈・技術指導事業、各国での交流協定の締結、英語による課程修了制度の一部実施など国際化への取り組みの成果が大きいといえる。

情報分野の教育の裾野の拡大・学際化や国際化などは理事長のトップダウン意思決定によるところが大きい。意思決定の速さは、私立大学・大学院では経営上の戦略とも関連する。また、意思決定の「軽やかさ」は専門職大学院という教育主体の大学院の性格による面も大きい。

## 6. 創立 20 周年後、情報学研究科はどこに行く？

10 年前の研究科長時代、定年後に着任した iCeMS を振り返ってみた。10 年前の情報学研究科の将来構想は現在どうなったであろうか。情報学研究科のホームページを見て、ええーと思った事項を下記に挙げてみたい。

### (1) 博士定員の充足率

博士定員は私が研究科長の時、研究大学院のプライドが許さないという批判のある中、14 名入学定員を減らし、60 名とし、代わりに修士定員を 21 名増の 189 名とした。平成 29 年度情報学広報には 4 月現在で定員 60 名に対して 25 名入学となっている（後期入学者を含めるともう少し増えるでしょうが）。京大の情報学研究科はそんなに魅力がないのですか。東大も同じでしょうか？

### (2) 複雑系科学専攻の名称変更

「先端数理工学専攻」と名称変更になっているが、誰が見ても「数理工学専攻」との差別化が理解できない。数理工学からは異論が出なかったのでしょうか、不思議です。

### (3) ホームページの「情報学とは」

情報学研究科が設立された平成 10 (1998) 年当時は「情報学」という言葉は目新しく、また数理工出身、電気出身の先生方からはアイデンティを無視されたような印象もあって、情報学の理念、対象、手法・応用範囲、位置づけ、構成について明確にするため、ホームページのみでなく、封筒の下までその文言が印刷されていた。現在、情報

学は広く認知され、また情報の扱う分野や裾野も非常に広く学際的になっている。現在のホームページの「情報学とは」にはいかにも古臭い文言が創立当時のまま並んでいます。理念は重要ですが、創立 20 年を経過したいま、人文社会科学、数理と情報、情報と電気の融合など情報学研究科での「実態」が問われます。

### (4) 国際化

ホームページの教員一覧を見ても外国人教員はほとんど見当たらない。iCeMS では外国人研究者比率 30%であったので、雲泥の差です。情報学研究科でもクリティカルマス 15%として 20 名程度のアクティブな外国人教員が基幹講座で必要ではないでしょうか。

### (5) 6 専攻による研究教育体制

10 年前と比較して余り変わり映えのしない研究体制と研究内容になっているように見える。私は研究科長の時、4 専攻、大講座制として、新しい情報分野の研究教育にダイナミックに対応できる研究体制の構築を模索した（下記に 10 年前の私案を示す）。現在の iCeMS では文科省の予算がほとんどなくなったので、京大の教員定員の配置を血の出る思いでお願いしているようですが、一人、二人の定員獲得でも大変のようです。情報学研究科では定員削減があるとはいえ、100 名以上の多くの教員定員があり非常に恵まれているわけですから、このメリットを十分に生かした研究教育体制の確立が必要と思います。

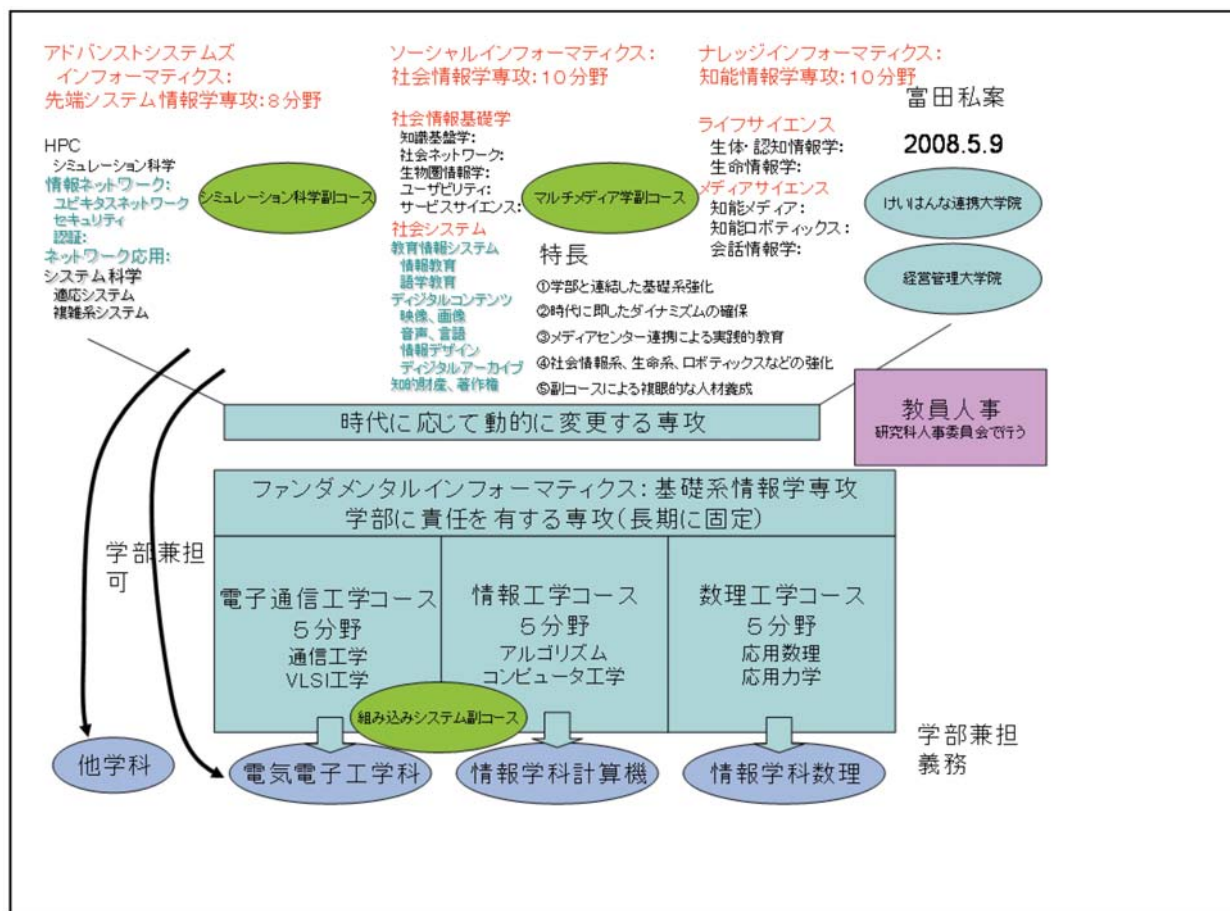
### (6) 教育プログラムの継続発展

これまで文科省の教育プログラム改革が名前を変えながら多数実施され、最近では博士課程教育リーディングプログラムとして京大情報学研究科では「デザイン学」が実施されてきた。どこの大学でも、多くの教育プログラムへの申請に当たって面子にかけて応募し、採択され、文科省にネジを巻かれ奮闘するも、プロジェクト終了後金の切れ目は縁の切れ目といわんばかりに跡かたもなく消滅（申請書では終了後も何らかの形で継続を確約しているにも関わらず）してしまうのが実態ではないだろうか。その間の努力たるや大変なもの

があり、達成感というよりも虚しさが残るのではないか。現在推進中の「デザイン学」は10年前の将来構想の中にすでにその芽があったものであり、何らかの永続的な取り組みが今後必要ではないかと思う。

平成 30 (2018) 年 4 月から中村佳正先生が研究科長に再登板で就任された。昨今の文科省から

の締め付け、業績第一主義の横行などでそれどころではないといっている暇はなく、新研究科長の下で情報学研究科の将来を真剣に「早急に」考えていただきたく思います (今までは余りにもテンポが遅すぎる)。創立 30 周年に向けての壮大なビジョンの構築とその早急な実現を切に期待しています。



## 開かれた同窓会，超交流の10年

情報学研究科同窓会 会長 桑 直 人

### 沿革

情報学研究科同窓会は、第一期の卒業生の誕生を待って、情報学研究科の発足からやや遅れた2000年11月3日に発足した。各専攻のなかから委員をつのり、合同運営の形で組閣された。当初の数年間一般的な同窓会として、卒業生の加入案内、情報学関係のイベントの告知などを任として運営された。具体的には名簿管理、会費の集金・管理、会報の発行、年次の学内発表などが業務としての同窓会活動であった。当然のごとく業務は役務と化し、各委員は一方で本業を抱えながらその役務をこなすことに難を抱えるようになった。先の情報学研究科10周年記念誌が発行された2008年には、いよいよ委員の中に同窓会のあり方を再考する機運が高まった。

当時の若手幹事が氣勢をあげ、同窓会組織の若返りと、卒業生にとって魅力的で自発的に参加したくなるような会への転換が求められた。そのような流れの中、2009年に同窓会運営方針の大幅な見直しとともに、「超交流会」を軸とした若手が主催する外に開かれた同窓会へと変貌を遂げた。

### 同窓会のあり方

2009年の同窓会運営方針の大幅な見直しにより、幹事として一会員として同窓会に何を求めるかの議論があった。

何よりもまず若手が参加して面白いと思える同窓会にすること、そしてその同窓会を無理なく運営でき、結果的に長く継続するものにしていくことが方針として挙げられた。我々としては積極的に同窓会を維持する代わりに、もっと受動的に、会員がある日思い出したときに常にそこにあり、必要なときに必要な出合いを提供できればそれで十分であると考えている。早速、本業を抱える幹

事が無理なく続けられるよう業務を簡素化し、会報などの停止、積極的な加入勧誘など負担となるものは廃止した。

次に重荷になっていたのは会員名簿管理であった。卒業式の当日に卒業生全員を会員として勧誘することは労多くして功少なく、数年経ってメールアドレスが無効になり連絡が取れなくなる会員が多い。そこで、卒業式や入学式では同窓会の告知と入会案内にとどめ、能動的に会員登録する方を受け止めるという体制に変更した。また、会費に関しても年度ごとの徴収は捕捉と実施が困難であるため、一度の入会金により終身会員として扱うことにした。ちなみに、終身会員であれば、同窓会主催の会の参加費などに割引が適用される。

ときに、情報の世界にもコモディティ化の波が押し寄せ、ホームページの管理など旧態然とHTMLを手書きする世界から、2008年にはGoogle Appsなどのクラウドサービスが勃興していく。本会もいち早く連絡網をGoogle Appsに移行し、手間のかかることはすべて既存のサービスに置き換えたため、より簡便にホームページ管理や会員管理ができるようになっている。今ではメール、ホームページ、入会受付フォームなど一通りのものがすべてオンラインサービスによって賄われている。また、入会金やイベント参加費の支払いにいち早くPaypalを採用し、オンラインですべてを完結させる体制ができた。最近では、ネット銀行の利用も可能となっており、同窓会の資産管理などもどんどんとデジタル化され、幹事の間でも透明性をもった資産管理ができるようになっていく。

年に一度京都で開催される総会も東京組がテレビ会議で出席しており、どこにいても同窓会運営に関わることができるようになっていく。

## 外に開かれた同窓会

従来の同窓会イベントは、当然、情報学研究科卒業生が出席することが前提で企画されるものだった。その閉塞的な空気が逆に同窓会の魅力を低下させている、という声が若手幹事から上がり、開催する側も楽しい同窓会にするために話を聞きたい人・呼びたい人と呼んではどうか、という”外に開かれた同窓会”を企画することになる。それが、2009年に開催され今も10年来続く「超交流会」である。

## 超交流会

超交流会 (Super Networking) は、毎年5月または6月の土曜日に時計台の百周年記念ホールで開催される。卒業生はもちろん一般参加が自由であり、誰でも「超交流」したいひとを受け止めている。「超交流」とはその名の通り”超”交流であって、なにかのテーマを決めてそれに関して集まるという類のものではない。人と人が出会ってアイデアがスパークする、スパークが連鎖する、そんな場所である。場合によって人生を変えてしまうかも知れない出会いがある場所である。

例年の構成は、午前中は百周年記念ホールでプレナリーセッション、午後は常設展示と各会議室でのパラレルセッションとなる。各セッションは45分構成で、午後のパラレルセッションは通常3つある。

プレナリーセッションでは、1分間スピーチ、講演、トークセッションと続く。1分間スピーチは、とにかく何かを訴えたい人が百周年記念ホールで「やっていること、望むこと」などを熱く語る1分間である。仕事を探している、一人で初めたプロジェクトに支援してほしい、こんな会社を始めたので興味のある人がいれば話したい、など訴える場所を求めている人たちが集まる。市町村の経済戦略局の方が市の取り組みをポップで紹介する、などの硬派軟派のスピーチが続くため、会場は否が応でも盛り上がる。何よりも毎年の司会進行を請け負う今村元一氏と深田浩嗣氏の軽妙な

トークと緩い空気が1分間スピーチの初挑戦者の緊張を和らげ、会場の一体感を一層高めている。

記念すべき第一回、超交流会2009の基調講演は堀場雅夫氏(堀場製作所最高顧問)に依頼させていただいた。以来、各界でご活躍の大先輩を中心として講演を依頼している。CNNの「世界を変える8人の天才」にも選ばれたロボット学の石黒浩先生(ロボットではなく本人)には度々ご登壇いただいている。また、直接情報学と関係しない演者も多数招聘している。奇しくも本年エベレスト登頂半ばで逝去された栗城史多氏も2010年に自身の挑戦についてご登壇されている。ご冥福をお祈りしたい。これら時代を牽引する方々のご講演が毎年の看板セッションとなり、続くトークセッションは複数の演者でよりフランクに業界の本音を語り合う膝詰めの議論が白熱する。

常設展示は企業展示を中心として30件程度並ぶ。百周年記念ホールで昼間からアルコールが振る舞われ巨大な飲み会の様相も呈しながら、そこかしこで飾らない会話が展開される。ちなみに、展示は会社紹介にとどまらず、企画ものやアート系など様々な展示が並ぶ。なんでも何か発表したければ場所を提供するため、自作エナジードリンクの試飲コーナーなどよくわからない展示もある。書道家が色紙に好きな字を書いてくれる、ネイルアーティストが男子にもネイルしてくれる、など枠を決めない交流をすべて飲みこんでいく。

常設展示を通じて、この10年の間にいくつかの新進気鋭のベンチャー企業が中堅、大企業へと育っていく様子を超交流会とともに追いかけてきたといえる。クラウドワークス(代表:吉田浩一郎氏)は立ち上がりの頃から超交流会に出展し起業の経緯などを説明していたが、今では誰もが知るクラウドソーシングサービスとなっている。

特に初期の超交流会は、ある種のインキュベーションラボの様相を呈していた。ベンチャー企業やIT関連ビジネスに詳しい本荘修二氏(経営コンサルタント)や、人と人をつなぐプロフェッショナルを自称する勝屋久氏(コネクター、元



IBM, IPA 未踏 PM) に毎年ご参加いただき、その触媒効果により超交流会が学外の IT 関連の方々同士をつなぐ場として機能してきた。その勢いの中に学内関係者も巻き込まれる形で超交流が進んできたといえる。今では同窓生でなくても、超交流会を通じてつながったもの同士が超交流会を同窓会として集まっている状況が生まれている。『ダイヤモンドオンライン』の取材記事には「自己増殖するコミュニティ」と紹介して頂いた(『大学は起業家に必要なものが揃うスゴい土壤だ!』(2012年9月24日))。

最盛期には参加者 560 名を数え、今でも平均 300 名の参加がある。来場者比率は、京大情報学同窓会正会員 (20%)、大学生大学院生 (20%)、一般社会人 (60%) 程度で推移している。

午後のトークセッションの詳細については、超交流会サイトを参照いただきたい。時代とともにベンチャー、インキュベーションといった話題から広く、30 代の生き方、シリコンバレー体験談、ベンチャーと育児、在宅テレワーク、医療系 IT 起業、40 代の挑戦、まで情報と生き方に関わるテーマに広がっている様子が伺える。年ごとに現れるキーワードも、ゲーミフィケーション、クラウド、IoT、Virtual Reality、銀行 API、ドローン、AI、ブロックチェーンと世相を反映したものとなっており、10 年の変遷をたどるのに興味深い記録となっている。特にここ数年は、企業展示が「製品紹介」から「人材募集」に大きくシフトしている。情報学分野の人材の枯渇が顕著に伺えると同時に、本学情報学研究所卒業生の社会での役割の大きさを改めて実感するところである。学生諸氏は是非とも超交流会に参加して、情報学分野の人間がどのような形で何を社会に還元できるのか考える機会としていただきたい。

#### いつもそこにある同窓会

以上のような活動を通じて、現状では持続的に同窓会の運営資金が確保されており、組織として安定的にある程度自立的に運営できている。一方

で、この 10 年での幹事の高齢化は否めないところであり、上手に次世代の会員に会を引き継いでいただきたいと願っている。現役生であっても卒業を待たず積極的に飛び込んでいただければ幸いである。おそらく次の 10 年では、超交流会とはまた違った形で、変化の激しい情報の世界に最適な次世代の会運営になっていくものと期待している。今後とも同窓生の積極的な入会とイベントへの参加などを通じた陰日向のご支援をお願いしたい。

我々はこれからもゆるい連携で同窓会を維持していく。同窓生に、必要なときに必要な場、立ち止まって考えたいときに何かわからない何かを探しに行ける場所、そんな居場所を提供し続けたい。

なによりも毎年の研究科長のご理解と研究科のご支援により百周年時計台記念館を借り切るという特権に浴しつつ超交流会を継続できたことに心から感謝の意を表したい。また、情報学研究所の事務の方々にも委細に渡り都度ご尽力いただいているおかげをもって会を継続できていることを申し添える。研究科には今後も変わらぬご支援を賜りたく切願するものである。

最後に、この 10 年の変革と自律的な同窓会運営に特に寄与した幹事を列挙し謝辞とする。(阿久澤 陽菜, 今村 元一, 岡本 雅子, 岡本 昌之, 片山大, 久保木 猛, 誉田 太朗, 佐藤 健治, 谷口 忠大, 永原 正章, 延原 章平, 深田 浩嗣, 満永 拓邦)

参考：超交流サイト

<http://www.johogaku.net/>

糸 直人 (社会情報学専攻 2002 年 4 月～  
2006 年 9 月)



# 平成 30 年度教員配置一覧

2018. 4. 1.現在

専攻名	講座名	分野名	担当教員名				備考
			教授	准教授	講師	助教	
知能情報学	脳認知科学	脳情報学	神谷 之康		細川 浩	前川 真吾 間島 慶	理化学研究所
		心理情報学 認知コミュニケーション 計算論的認知神経科学 [連携ユニット]	熊田 孝恒		水原 啓暁	市瀬 夏洋	
	認知システム	知能計算 集合知システム 会話情報学	山本 章博 鹿島 久嗣 西田 豊明	山田 誠 中澤 篤志		小林 靖明 大本 義正	
	知能メディア	言語メディア 音声メディア 画像メディア	黒橋 禎夫 河原 達也 西野 恒	河原 大輔	柴田知秀 吉井 和佳 延原 章平	村脇 有吾	
	メディア応用 <協力講座>	映像メディア ネットワークメディア メディアアーカイブ	岡部 寿男 森 信介	飯山 将晃 宮崎 修一		小谷 大祐 亀甲 博貴	学術情報メディアセンター
	生命システム 情報学 <協力講座>	バイオ情報ネットワーク	阿久津達也	田村 武幸		森 智弥	化学研究所
社会情報学	社会情報モデル	分散情報システム 情報図書館学 (ソーシャルメディアユニット) 情報社会論 [連携ユニット]	吉川 正俊 神田 崇行 田島 敬史	馬 強		清水 敏之 山本 岳洋	国際高等教育院 (併任)
				山田 篤			京都高度技術研究所
	社会情報 ネットワーク	広域情報ネットワーク	石田 亨	松原 繁夫 林 冬恵			
		情報セキュリティ [連携ユニット]	阿部 正幸	TIBOUCHI, Mehdi			NTT
		市場・組織情報論 [連携ユニット]	横澤 誠	木下 貴史			(株)野村総合研究所
	生物圏情報学	生物資源情報学	守屋 和幸	三田村啓理		西澤 秀明 VINCENOT, Christian Ernest	
		生物環境情報学	大手 信人	小山 里奈			
	地域・防災情報 システム学 <協力講座>	総合防災システム	多々納裕一	SAMADDAR, Suvhajyoti			防災研究所
		巨大災害情報システム	矢守 克也	大西 正光			防災研附属巨大災害研究センター
		危機管理情報システム	畑山 満則				防災研附属巨大災害研究センター
医療情報学<協力講座>		黒田 知宏	岡本 和也		平木 秀輔 大寺 祥輔	医学部附属病院	
教育情報学<協力講座>		緒方 広明	上田 浩			学術情報メディアセンター	
先端 数理学	応用解析学	逆問題解析 非線形解析	磯 祐介 木上 淳	藤原 宏志 CROYDON, David Alexander	久保 雅義 白石 大典		
		非線形物理学	非線形力学 複雑系数理	青柳富誌生	寺前順之介	宮崎 修次	原田 健自 筒 広樹
	応用数理学	計算力学 応用数理科学	西村 直志	吉川 仁 田口 智清		新納 和樹	

専攻名	講座名	分野名	担当教員名				備考
			教授	准教授	講師	助教	
数 理 工 学	応用数学	数理解析 離散数理	中村 佳正 永持 仁	辻本 諭		上岡 修平 SHURBEVSKI, Aleksandar 福田 秀美 大木健太郎	
	システム数理	最適化数理 制御システム論 応用数理モデル [連携ユニット]	山下 信雄 太田 快人	加嶋 健司			(株)日立製作所
	数理物理学	物理統計学 力学系数理	梅野 健 矢ヶ崎一幸	Ⓣ佐藤彰洋 柴山 允瑠		山口 義幸	
	数理ファイナンス<協力講座>						
システム科 学	人間機械共生系	機械システム制御 ヒューマンシステム論 (モビリティ研究グループ) 統合動的システム論	杉江 俊治 加納 学 大塚 敏之	西原 修 櫻間 一徳		藤原 幸一	
	システム構成論	適応システム論 数理システム論	田中 利幸 下平 英寿			上田 仁彦 劉 言	
	システム情報論	情報システム 論理生命学 医用工学	石井 信 松田 哲也	増山 博之 中尾 恵	大羽 成征	Ⓣ山本詩子 今井 宏彦	
	応用情報学 <協力講座>	スーパーコンピューティング	中島 浩	深沢圭一郎		平石 拓	学術情報メディアセンター
	計算神経科学[連携ユニット]		川人 光男 銅谷 賢治 深井 朋樹				(株)国際電気通信基礎技術研究所 OIST 理化学研究所
	計算知能システム [連携ユニット]		上田 修功				NTT
通信情報システム	コンピュータ工学	論理回路 計算機アーキテクチャ 計算機ソフトウェア	湊 真一 高木 直史 五十嵐 淳	ⓉLE GALL, François Pierre Marcel 高木 一義 末永 幸平		玉置 卓 高瀬 英希 馬谷 誠二	
	通信システム工学	デジタル通信 伝送メディア 知的通信網	原田 博司 守倉 正博 大木 英司	村田 英一 Ⓣ松村 武 山本 高至 新熊 亮一		水谷 圭一 西尾 理志 佐藤 丈博	
	集積システム工学	情報回路方式 大規模集積回路 超高速信号処理	佐藤 高史 小野寺秀俊 佐藤 亨	石原 亨	廣本 正之	塩見 準 橋本 大志	
	地球電波工学 <協力講座>	リモートセンシング工学	山本 衛				生存圏研究所
		地球大気計測	橋口 浩之				古本 淳一 矢吹 正教 生存圏研究所
高度情報教育基盤ユニット		山本 章博	Ⓣ浅野 泰仁 ⓉJATOWT, Adam Wladyslaw				
<知能> 協調的知能共同研究講座			Ⓣ島崎 秀昭 Ⓣ船越孝太郎		Ⓣ下西 慶		

(参考)

Ⓣは年俸制特定教員を示す。

## この 10 年間の研究科での定年退職者（早期退職者含む）

### [平成 21 年 3 月 31 日付け]

通信情報システム専攻	教 授	富田 眞治
社会情報学専攻（協力講座）	教 授	河田 恵昭
システム科学専攻（協力講座）	教 授	金澤 正憲
システム科学専攻	講 師	荻野 勝哉

### [平成 22 年 3 月 31 日付け]

数理工学専攻	教 授	宗像 豊哲
システム科学専攻	教 授	熊本 博光
システム科学専攻	教 授	片井 修

### [平成 24 年 3 月 31 日付け]

知能情報学専攻	教 授	小林 茂夫
知能情報学専攻	教 授	後藤 修
知能情報学専攻	教 授	佐藤 雅彦
通信情報システム専攻	教 授	湯浅 太一
事務長		野木 正博

### [平成 25 年 3 月 31 日付け]

社会情報学専攻	教 授	酒井 徹朗
数理工学専攻	教 授	福嶋 雅夫
数理工学専攻	教 授	岩井 敏洋
システム科学専攻	教 授	酒井 英昭
通信情報システム専攻	教 授	吉田 進
知能情報学専攻	准 教 授	稲垣 耕作
社会情報学専攻（協力講座）	教 授	吉原 博幸

### [平成 26 年 3 月 31 日付け]

知能情報学専攻	教 授	奥乃 博
---------	-----	------

### [平成 27 年 3 月 31 日付け]

知能情報学専攻	教 授	乾 敏郎
複雑系科学専攻	教 授	山本 裕
通信情報システム専攻	教 授	高橋 達郎
社会情報学専攻	助 教	荻野 博幸

[平成27年9月30日付け]

社会情報学専攻（協力講座） 教 授 林 春男

[平成28年3月31日付け]

通信情報システム専攻 教 授 岩間 一雄

通信情報システム専攻 特定教授 AVIS, David Michael

[平成29年3月31日付け]

社会情報学専攻 教 授 田中 克己

複雑系科学専攻 教 授 船越 満明

システム科学専攻 教 授 高橋 豊

通信情報システム専攻（協力講座） 教 授 津田 敏隆

[平成30年3月31日付け]

知能情報学専攻（協力講座） 教 授 美濃 導彦

数理工学専攻 准 教 授 五十嵐 顕人

## 物故者

**藤岡 久也**

准教授（複雑系科学専攻）

平成 23 年 9 月 14 日逝去 享年 44 歳

**乗松 誠司**

准教授（通信情報システム専攻）

平成 27 年 10 月 30 日逝去 享年 53 歳

**金子 豊**

助教（複雑系科学専攻）

平成 28 年 3 月 22 日逝去 享年 57 歳

**松山 隆司**

教授（知能情報学専攻）

平成 28 年 12 月 12 日逝去 享年 65 歳

## 情報学研究科創立 20 周年記念誌(完全版)のご案内

本冊子は情報学研究科創立 20 周年記念誌のダイジェスト版です。  
完全版の pdf ファイルは以下の URL または QR コードから入手できます。

<http://www.i.kyoto-u.ac.jp/archive/pdf/20kinen.pdf>



完全版の目次は以下のようになっております。

### 目 次

ごあいさつ .....	京都大学大学院 情報学研究科長 中 村 佳 正	1
これからの情報学で注意すべきことは? .....	長 尾 真	3
情報学研究科創立 20 周年に寄せて .....	富 田 真 治	7
開かれた同窓会、超交流の 10 年 .....	情報学研究科同窓会 会長 糸 直 人	13
研究科 20 年史 .....		17
知能情報学専攻 .....		17
社会情報学専攻 .....		39
先端数理科学専攻 .....		65
数理工学専攻 .....		75
システム科学専攻 .....		95
通信情報システム専攻 .....		122
情報学研究科と情報学系 .....	佐 藤 亨	147
研究科建物の現状 .....	太 田 快 人	153
グローバル 30 と国際コース .....	山 本 章 博	155
アジア情報学セミナー .....	永 持 仁	161
ICT イノベーション .....	鹿 島 久 嗣	177
京都大学デザインスクール .....	石 田 亨	179

### 資 料 集

栄誉・表彰 .....		183
情報学シンポジウム プログラム .....		199
博士学位授与 .....		209
修士論文タイトル .....		237
就職関連データ .....		297
教員配置一覧 .....		309
この 10 年間の招へい研究員 (客員教授・准教授) .....		331
この 10 年間の研究科での定年退職者 (早期退職者含む) .....		335
物故者 .....		337











## 京都大学大学院情報学研究科

Graduate School of Informatics, Kyoto University